

教育基本法 学校教育法 学習指導要領  
第6次山形県教育振興計画  
第2次大江町教育振興計画

**学校教育目標【めざす子ども像】**  
**明るく かしこく たくましい 子ども**  
心豊かな子ども  
進んで学ぶ子ども  
健康な子ども

**【保護者・地域の願い】**  
○子ども一人ひとりの存在を尊重してほしい  
○確かな学力や社会性を身につけさせてほしい  
○当たり前のことを当たり前に行える子どもになってほしい  
○地域が好きな子どもになってほしい  
○子どもや保護者、地域の心に寄り添う学校であってほしい

**めざす学校像**  
**ぬくもりのある学校**  
1 心はずませて学ぶ学校  
2 「子ども」「教職員」「保護者」「地域」等、相互の信頼関係が構築されている学校  
3 家庭、地域に信頼・支持される学校



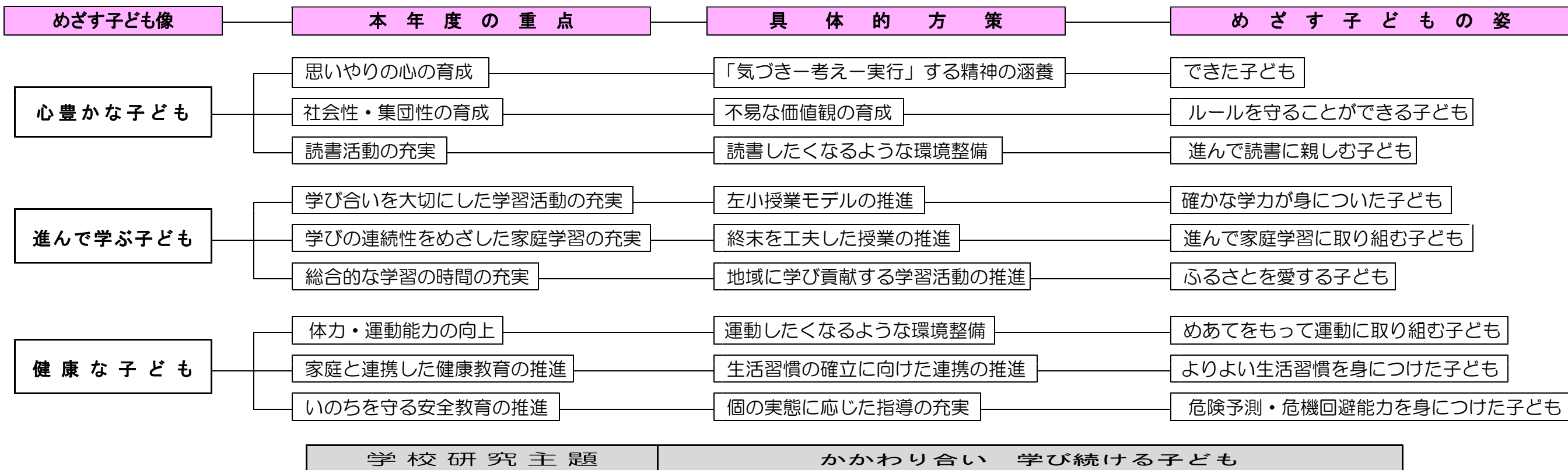
**めざす教職員像**  
**同僚性を大切にした教職員**  
1 子ども、家庭、地域の声に“耳を傾ける”“心を寄せる”教職員  
2 “One for all, All for one.”の精神で職務の遂行に努め、専門的力量を高め合う教職員  
3 教育に携わる者としての自覚と誇りをもった教職員

**【重点取組事項】**  
1 「共生」「信頼」を基底とした教育活動の推進  
2 地域に貢献する特色ある教育活動の推進  
3 「道徳」「英語」の教科化に向けた取り組みの推進  
4 「いじめ」「体罰」「教職員の不祥事」の根絶

過去に学び 今を見つめ 未来を託す

第一番左沢学校の思いを胸に

スローガン 『共生 = One for all, All for one. =』



# 「左小授業モデル」の構築をめざして

段階	各段階のねらい	各段階のポイント	授業デザイン	心がけたいこと
導入	○学び合いが充実するめあてや問題場面の設定	○レディネスにもとづく、子どもの実態に合った問題場面の設定 ○前時の学習や家庭学習が生きる問題場面の設定 ○やりがい感じられ、多様な考えが生まれる問題場面の設定	○他社の教科書研究 ○前時との関連や家庭学習との関連化	○本時の問題場面に対する子どもたちのレディネス（達成度・思考方法・つまずきの傾向）を把握したうえで設定とその対応策の事前準備を ○「まずはB問題」の心がけを
自力解決	○学び合いにつながる自力解決	○自分なりの考えをもたせる ○何がわからないか、どうすれば解決できそうかのアドバイス ○ねらいをもった机間指導や座席表の活用による児童の思考の把握 ○学び合いにつながる自力解決 ・わからない子、途中までの子、誤答などの把握 ○次の学び合いが、発表会にならないような手立ての工夫	○既習事項との関連化 ○解決（思考）の見通しと結果の見通し ○思考方法にあった支援 ○学び合いのための自力解決の場の工夫	○問題場면을提示したら、教師は、前時とのつながりや違いの焦点化を図り見通しをもたせる程度とし必要以上の解説は行わない。まず、取り組ませてみる ○何がわからないのか、どこまでならでできるのかを子どもたち自身が押さえられるようにするとともに、子どもたちの思考に寄り添った助言を ○自分なりの考えを書くことを大切に ○誤答などを生かす
集団解決	○学びのよさがあじわえる集団解決	○最後まで聴く ○集団における学びのよさ（「わかった」「広まった」「深まった」）をあじわわせる ○個の発言を、友だち、先生、教科書等と「つなぐ」・「もどす」 ・「〇〇さんと同じで（違って）・・・」「〇〇さんの考えを聞いて・・・」 ○思考の焦点化やゆさぶり ○子どもの思考のながれやあしあとがわかる板書やノート ○ねらいにそったジャンプ問題の設定	○ねらいをもった学習形態の工夫 ○発問や発表させる場面の吟味 ○児童の発言がつながる指名の工夫 ○教師による誤答等の意図的提示 ○立ち位置の工夫 ○ジャンプ問題の提示	○自分の考えを発表しやすい、間違えても嘲笑されない、ここまでわかったけどその後がというような学級の雰囲気醸成を ○学び合いの形態は手段。子どもたちの必要感や教師のねらいにそった集団化 ○子どもの発言をつないでいくバレーボール型の授業を ○わかったことを共有するのではなく、わかっていく過程の共有を ○間違いは消さないなど、きれいさではなく学びが振り返られるノート指導を ○「全員共通」「問題選択」「個別」等のジャンプ問題に取り組みさせることにより、活用力の育成とともに基礎基本の定着を
終末	○学び続ける子ども ○学び合いのよさの実感と次時への意欲の喚起	○本時の学習の定着 ○子どもの言葉を生かしたまとめ ○自分の学びの振り返り ○次時につながる問題のへ取り組みや提示	○付けたい力の定着 ○めあてに対応したまとめ ○学び方の振り返り ○次時の指導に生きる終末の工夫 ○学びの連続性につながる家庭学習の提示	○練習問題の最後に次時の学習場面の問題を。教師は、次時までにそのレディネスを把握し次時の指導に生かす ○「まとめ」とは「めあてに即して何がわかったか」、「振り返り」とは、「どのようにわかったか」 ○終末は、本時の学習内容の定着と、次時の授業をどうデザインしていくかの2つの機能をもつことの共通理解を

なぜ、学校研究に取り組むのでしょうか。それは、教師全体の指導力を高めることが子どもの学力向上を含めたよりよい人間形成につながるからです。学校研究は学校経営目標具現化の中核の一つであり、だからこそ学校研究でめざす授業の日常化が求められています。授業がうまい先生は学級経営も巧みです。授業と学級経営のどちらか一方しか秀でていないという先生に会ったことはありません。それは、生徒指導を意識した授業に心がけているからに他なりません。本校では、「共生教育」を学校経営の基底においています。共生教育では、できる子も苦手な子もいることが大前提になります。その子どもたちが、「学び合い」によって心も頭も伸びていく授業をめざしています。この考え方は、「アクティブ・ラーニング」や「探究型学習」と異なるものではありませんし、学び合い学習を推進していくことが、これからの子どもたちにとって大切であると思っています。

1単位時間の中心は「集団解決」の場です。グループにしたからとか、話し合いをさせたから学び合いが成立したとは思いません。極論かもしれませんが、わかっていることは交流する必要はないと考えます。わからないことを探究していかなければ意味がありません。そういう学び合いにするためにはどうすればよいか。それを考えていかないと、単なる話し合いの場、発表の場になってしまいます。質の高い学び合い学習とするために、それに耐えうる課題設定か、自力解決をどうするか、どんなジャンプ問題に取り組みさせるか、終末をどう工夫するかといった、一連の流れで授業をデザインすることが必要になってきます。

また、学び合いで大切にしてほしいのは、先生や友だちの考えや教科書に書いてあることを写し取るという模倣ではなく、先生や友だちの考え、書いてあることを土台にして、自分の考えをつくる、広げる、深めるということです。一人では登れないところに、先生や友だちの考えなどを足場にしてたどりつく、そんな姿をイメージしてください。

自分の指導スタイルを変えることは容易ではありません。しかし、変わろうとする意識は持ってください。そして、取り組んでみてください。取り組んで初めて、成果や課題が見えてくるはずですよ。